

第10回 社会教育委員会議 議事概要

1 議事

報告事項

- (1) 令和3年度札幌市教育費予算について
- (2) サッポロサタデースクール事業令和2年度実施状況及び令和3年度実施方針について

協議事項

- (1) 今期の協議テーマ「地域課題に対応する社会教育の在り方について～災害の経験から考える～」について

2 日時

令和3年(2021年)3月25日(木) 10時00分～12時00分

3 場所

S T V北2条ビル6階 教育委員会A・B会議室

4 出席者

- (1) 委員(出席9名) 欠席 牧内委員
一戸委員、臼井委員、佐久間委員、鈴木委員、辻委員、土田委員、原田委員、安田委員、山口委員
- (2) 事務局(8名)
小田原生涯学習部長、中目生涯学習推進課長、小柳生涯学習係長、寺崎社会教育担当係長、小林職員、中原職員、前崎職員、横山職員

5 開催形態

公開(マスコミ関係者1名傍聴:北海道通信社1名)

6 会議内容

- (1) 令和3年度札幌市教育費予算について
 - ア 事務局から「令和3年度局別施策の概要」【資料1】、「社会教育関係団体への補助金の交付について」【資料1-1】を用いて報告(小田原部長)
 - イ 質疑応答
 - ・地域活動推進費が前年度に比べて減っているのは、サタデースクールの実施校減少が原因か。(原田委員)

⇒新型コロナウイルス感染症の関係で目標数が減ったことと、例年通りのプログラム実施が見込めないことが理由。（寺崎係長）

・サタデースクールと学校図書館地域開放事業の予算内訳はどうか。知り合いの司書から開放図書館事業1校当たりの予算額が減ってきているという話を聞いた。（原田委員）

⇒札幌市アクションプランが始まってから委託費はここ10年程度変わっていない。予算額も委託校の増加に合わせて増やしている状況である。（前崎職員）

・参加校が増えれば増えるほど、全体の予算も増えている状況か（原田委員）

⇒現在はそのとおり。予算が組めているので、委託料は変わっていない。（前崎職員）

(2) サッポロサタデースクール事業令和2年度実施状況及び令和3年度実施方針について

ア 事務局から「令和2年度サッポロサタデースクール事業実施報告」【資料2-1】、「サタデースクール通信」(2020第2号)【資料2-1-1】、「令和3年度サッポロサタデースクール事業実施方針」【資料2-2】、「サッポロサタデースクール事業実施要領」【資料2-2-1】を用いて報告（寺崎係長）

イ 質疑応答

・外部人材を活用できるか。（原田委員）

⇒プログラムの講師ということであれば可能。（寺崎係長）

・オンライン開催を今後考えてほしい。（原田委員）

⇒実例はまだないが、各校で実施できる体制を整えば、事前相談のうえ開催いただいて問題ない。（寺崎係長）

・実施校が少なくなったのを元の数字に戻すのは大変だと思うが、地域で子どもを育てる機運を醸成するために非常に重要な事業だと思うので、何とか元の数字に戻ればと思っている。（佐久間委員）

(3) 今期の協議テーマ「地域課題に対応する社会教育の在り方について～災害の経験から考える～」について

ア 事務局から「地域課題に対応する社会教育の在り方について～災害の経験から考える～報告書(案)【資料3】を用いて説明（寺崎係長）

以下説明要旨

前回送付した報告書案の内容から主な変更点について説明した。

- ・「1 協議テーマについて」の中で文言の細かな修正を行っているほか、変更後は、項目ごとに分けずに一つの文章にまとめる形とした。
- ・「2 災害の経験から見えてきた現状と課題」では、これまで箇条書きにしていたものを文章形式に変更した。
- ・「①災害に対する市民の意識」の平成 30 年度北海道胆振東部地震検証報告書にある市民アンケート調査結果の内容とそれを踏まえた考察については、今後グラフや図を入れることを検討する。
- ・「(2)現状から見えてきた社会教育の課題」については、皆様のご意見を現状と課題に分け、箇条書きで端的に記載していたが、それだけでは意味が通じにくい部分があるため、文章形式に変更し意味を補完するなどした。また、前項で整理した災害に対する課題の中で、社会教育の分野で応用できる課題について、それぞれ整理して記載した。
- ・「3 課題解決に必要な視点と方向性」について、社会教育のもつ意義と役割について述べたのち、社会教育の基盤である 3 つの視点の重要性がますます大きくなっていること、また 3 つの視点が今期の協議テーマにおいても、課題解決のため重要な視点になることを簡潔に説明する文章に変更した。方向性についての記載も次章の提言につながる内容へと整理した。
- ・「4 提言～地域課題に対峙する明日の地域のために」について、背景という表現が適切でないのではないか、また、提案と方策を分けることでかえってわかりにくいとのご意見があったことから構成を変更した。さらに細かな文言の修正に加え、皆様の協議内容をしっかり反映できるよう記載内容を見直した。

イ 協議

- ・項目ごとに修正等のご意見をいただきたい。（佐久間議長）

○「1 協議テーマ」について

- ・非常にわかりやすい文章になったと思う。3 ページ目の最終行を「協議することになりました」ではなく「協議いたしました」へ変更したほうがよい。（臼井委員）

- ・私も記載内容について賛同する。細かい部分だが2ページ目の3段落目は、大学の他に、小中高も入るように思うので、学校関係と広く書いたほうがよい。また、社会教育関係団体にはPTAも入り、大事な位置づけとなる。
(鈴木委員)
- ・文章全体を通して句読点の見直しをお願いしたい。個人的には読点が多い印象。
(臼井委員)
- 「2 災害の経験から見えてきた現状と課題」について
 - ・図を入れる予定とのことだが、データの図表か、それとも災害時のイメージ図のようなものか。
(鈴木委員)
 - ⇒グラフや図表の掲載を想定している。
(寺崎係長)
 - ・社会教育の課題の部分で、どこかに新型コロナウイルス感染症への対応を踏まえた記載が必要ではないか。災害の視点では、避難所における感染のこともある。
(臼井委員)
- 「3 課題解決に必要な視点と方向性」について
 - ・9ページ目の方向性4の3点目で、人に対して使う場合に「有効活用」と言うと、何か住民を下請的に使うようなニュアンスに思えてしまうので、例えば、「地域にはすでにリーダーとなり得る人材がいることが多いため、育成だけではなく、いかにして行政とつながり、活発に活動を展開できる環境整備を考える必要があります」といった記載がよいのではないか。
(辻委員)
 - ・語尾に「考えます」という記載が多いように感じた。社会教育の役割ですと言い切れるところは、言い切って行ってよいのではないか。
(原田委員)
- 「4 提言～地域課題に対峙する明日の地域のために～」について
 - ・11 ページ目(1)①リーダーの発掘について。3行目で「有効活用」ではなく、「地域の財産として共有されるよう」にしてはどうか。また、「聞き取り調査等を実施し、地域で活躍している人材のリストを作成することを期待している」とあるが、誰が調査して、誰がどういう人材リストを作るのかイメージがもてない。
(辻委員)
 - ・会議中は人材バンクといった意味合いで話し合われていたと思う。たしかにリストの作成となると、個人情報の問題などもある。リストアップするのではなく、見つけていく、把握するといった表現のほうがよいのではないか。

(鈴木委員)

- ・例えば「町内会やNPO、地元企業等での情報交換とか情報交流の促進により、地域で活躍している住民がお互いに見えるようにする」といった表現であれば、社会教育の範疇であり、できるようなイメージが沸いた。(辻委員)
- ・語尾のことで、(1)「～発掘・養成します」となっているが、今回の報告書は、この会議の名義で提言を行うもので、社会教育委員が実際に行うものではない。「発掘・養成」で切ってよい気がする。次ページ以降の提言も同様。提言の説明文には「～をします」という文言が出てこないの、体裁を整える意味でも。(鈴木委員)

○全体を通して

- ・8ページ目の方向性1の部分だが、「子どもたちが自分で判断し行動することが大切」とあるが、正直難しいように思う。それよりも、会議の中で何度か議論されていた「適切なところに助けを求めることができる」といったニュアンスの内容を入れることができないだろうか。(原田委員)
- ・個人的には、ここに書かれていることは、災害が起きたときに子どもが勝手に判断するのではなく、子どもたちがいずれ大人になった際に自分で判断できるようになるため、そういった意識を持って日々学びを深めていくということだと捉えていた。一方で、原田委員の言うように、子どもが勝手に判断するのは困るという読み方もできると思う。(一戸委員)
- ・行動するという文言に、助けを求めるという意味合いも含まれていると解釈していた。また、東日本大震災から10年が経過したが、釜石の「津波てんでんこ」も、子どもたちが大人の指示を待たずに、まずは逃げるといった行動で、子どもたちや親も助けることができた。(鈴木委員)
- ・イメージとしてはその時の感じだと思う。子どもたちが声をかけ合って、大人が居ないところで、自分で考えて避難した。とても印象に残っている。このことがベースにあるのではないかと思った。(一戸委員)
- ・8ページ目の方向性3が、子どもから大人へということで、記載内容が薄い印象を受けた。先ほどの方向性1では、子どもがというよりは、小さいころから、地域でそういった意識を育んでいくということ。方向性3では、最初は大人に教えてもらったことを子どものほうが早く習得して、それを子どもが大人

に還元する。そういった双方向の表現で整理されるとよいと思った。（一戸委員）

- ・ 私たちはP T Aというものを社会教育関係団体と言うことがあるが、報告書では、「P T Aなどの社会教育関係団体」と強調した表記になれば、私たちの活動も前進しているのだなという気がしている。（土田委員）
- ・ 14 ページ目のボランティアのところだが、「～生涯学習センターが中心となり」とあるが、社会福祉協議会は割と以前からボランティアの育成に力を入れているため、記載した方がよい。行政と地域、N P Oや民間が連携しながら動いていくことが最も重要だということを提言していくとよい。（安田委員）
- ・ 社会福祉協議会となると、教育委員会とは少し別な分野になるかもしれないが、いずれにしろ生涯学習センターだけではないので、「センター等」と記載したほうがいいのかもしい。（鈴木委員）
- ・ 基本的にすごくよくまとめられている資料だと思うが、14 ページ目で「期待します」といった語尾が多いため気になった。（原田委員）
- ・ 6 ページの3行目だが「発行も行っています」では社会教育委員が発行しているような感じを受けるため、「札幌市は発行しています」といった表現がよい。（鈴木委員）
- ・ 12 ページから13 ページに「I C T」と「I C Tツール」という言葉が混在している。ツールという言葉は不要かもしれない。（臼井委員）
- ・ 6 ページ目に「情報弱者への配慮や情報モラルの教育の充実」とあるが、社会教育として、やはりその情報判断能力というか、正しい情報を見極めるスキルをつけるというのも非常に重要だと思うので、「情報弱者への配慮や情報判断能力の醸成」または、「リテラシー」が良いかもしれない。あと、情報モラルの教育の充実ということで、一つ項目を入れると社会教育の分野としてはよいと思う。（鈴木委員）
- ・ 同じく6 ページ目の「異世代コミュニティ」は「世代を超えたコミュニティの再構築」という表現に変更。（辻委員）
- ・ 12 ページ目の「(2) I C Tの活用を推進します」と13 ページ目の「(3)情報の格差や情報による世代間の分断を解消します」は、読むとよくわかるのだ

が、ぱっと見たときにICTの活用が強調された記載内容に感じる。そのため、(3)の2行目にある情報の格差があることを前面に出し、アナログの手法も打ち出す必要があることを強めに出したほうがいいかもしれない。ただ、よく読むとわかるので、このままでも問題はない。(一戸委員)

- ・13 ページの内容を見ると、情報を入力すればするだけよいといった文章のトーンになっている気がする。現実的には情報が溢れている中で、フェイクの情報もかなりある。正しい情報を入力できる、あるいは適切な情報を入力できる、それが出来る人と出来ない人の格差というような表現を入れるとよいと感じた。(臼井委員)
- ・新型コロナウイルスの話は、本協議を進めていく中で、現在進行形の災害として入ってきた。話し合いの中では、皆、コロナの対策を念頭に話されてきたと思うので、「おわりに」だけではなく、「はじめに」や「協議テーマについて」のところでも記載があった方がよいのではないかと思った。(原田委員)

○最後に、各委員から、任期を終えるにあたり一言ご発言いただいた。

(4) 連絡事項

- ・今後の予定については、今日いただいたご意見を踏まえ、修正したものをお送りさせていただく。そちらをご確認いただき、その後については、佐久間議長と事務局で完成に向けた作業を進めてまいりたい。完成後は、5月下旬を目標に手交式を執り行いたいと考えている。ただ、新型コロナウイルス感染症対策のため、皆様方全員をお呼びすることはできないので、出席者を絞って開催させていただく予定。詳細は決まり次第改めてご連絡する。(寺崎係長)